

久元祐子さん ベーゼンドルファー 280VCを弾く

HISAMOTO Yuko played MOZART by Bösendorfer 280VC

“280VC”で聴く 『モーツアルト・ソナタ全曲演奏会 vol.3』

取材・文◎渡辺謙太郎(音楽ジャーナリスト)

サントリーホールのブルーローズを埋め尽くした満場の聴き手と、演奏が終わるたびに沸き起こる大喝采とブラヴォーの嵐。それは、この演奏家と楽器に寄せる信頼と期待の大きさをはつ

前半は、K・397の『幻想曲』で幕を開けた。終盤がドミナントの和音で中断された本作だが、この日の久元は有名なミュラー版とは異なる自作の補筆版を披露。終演後に行なった彼女へのインタビューによると、「ハ短調の『幻想曲』K・475の最後の部分を二短調に移し替えた」。そうで、その劇的で長大な音楽には、『280VC』の特質である「速くキレのある音の立ち上がり」が巧みに活かされていた。

続く『愛の神』による8つの変奏曲は、同じくこの楽器の特質である「あたたかな音色」に、とてもマッチ。中でも、冒頭主題の愛らしい装飾音や、第6変奏のきらびやかな両手の交差が秀逸だった。

そして、前半最後のソナタ第11番『トルコ行進曲付き』は、2014年発見の自筆譜に基づく新版で演奏。久元は15年にこの版を用いた録音を発表し、演奏会でもたびたび取り上げているが、初版と大きく異なるのが、第1楽章のゆつたりとした変奏部分と、第2楽章の優雅なメヌエットの冒頭。久元はこの新版で弾く意義を、「かつてルービンシュタインが、ショパン『幻想曲』の自筆譜を発見して、普及に努めたように、自分も頑張りたい」と語つており、この日の演奏もその言



に持ち込み、ライヴ録音（コジマ録音）も行つた。演目は、作曲者がウイーン移住直後に残した三つのソナタを中心とした全5曲。

前半は、K・397の『幻想曲』で幕を開けた。終盤がドミナントの和音で中断された本作だが、この日の久元は有名なミュラー版とは異なる自作の補筆版を披露。終演後に行なった彼女へのインタビューによると、「ハ短調の『幻想曲』K・475の最後の部分を二短調に移し替えた」。そうで、その劇的で長大な音楽には、『280VC』の特質である「速くキレのある音の立ち上がり」が巧みに活かされていた。

続く『愛の神』による8つの変奏曲は、同じくこの楽器の特質である「あたたかな音色」に、とてもマッチ。中でも、冒頭主題の愛らしい装飾音や、第6変奏のきらびやかな両手の交差が秀逸だった。

そして、前半最後のソナタ第11番『トルコ行進曲付き』は、2014年発見の自筆譜に基づく新版で演奏。久元は15年にこの版を用いた録音を発表し、演奏会でもたびたび取り上げているが、初版と大きく異なるのが、第1楽章のゆつたりとした変奏部分と、第2楽章の優雅なメヌエットの冒頭。久元はこの新版で弾く意義を、「かつてルービンシュタインが、ショパン『幻想曲』の自筆譜を発見して、普及に努めたように、自分も頑張りたい」と語つており、この日の演奏もその言

葉通り、譜面の読みが深く、作品への愛と満足とした生命力が全編に漲つてゐた。

後半は、『ソナタ第12&13番』を演奏。前者は、第2楽章の後半の20小節

に装飾を付加した初版譜を採用し、『280VC』の敏感で繊細な機能性が、その洗練された装飾語法を際立たせていたのが聴きどころ。

後者は、久元自身が『インペリアル』を用いた重厚で華やかな演奏とは、いい意味で対照的な造形。彼女はその比較を次のように述べていた。

「残響の長い『インペリアル』だとテンポがゆったりとなるのに對し、『フォルテピアノ風の軽やかな『280VC』は、意識していないのに速めになりますね」

また、今回のライヴ録音は、『280VC』をより広く知つてもらいたいという想いで実現。録音を手がけた小島幸雄（コジマ録音社長）は、「当社ではこれが『280VC』の初録音。大転換期にある名門ピアノの歴史的瞬間を記録した、大変おもしろい録音になると思います」と手応えを述べていた。

来年開催の第4回は、『パリの青春の旅』がテーマ。演目は今回よりも若い時代の作品が中心で、楽器は再び『280VC』を使用する予定のことなので、今から期待が高まる（9月8日（金）サントリーホールブルーロード）。